



名護高校だより

2017年7月2日

第5号

校長 大城 健

沖縄戦から73年、南燈慰霊之塔「慰霊祭」



6月23日「慰霊の日」、毎年この日が来ると私は心が痛みます。73年前の沖縄戦で、私は祖父母、伯父、伯母、多くの親戚を亡くしました。伯父は当時沖縄工業の生徒で、通信隊員として命を落としました。今ならば高校2年生でしょうか。時を同じくして名護高校の先輩である県立第三中学校、第三高等女学校の生徒達も従軍によって多くの尊い命が失

なわれました。将来を期待されながら、短い生涯を余儀なくされた先輩達の無念さはどれほどだったか、残された家族の悲しみはどんなに大きかったか。私達はその思いを決して忘れず、社会を見る目をしっかり養って、再び惨禍の起こることがないように、世界の恒久平和が実現できるよう努力していかねばなりません。亡くなった先輩方が祀られているのが、セミナーハウスの隣りにある「南燈慰霊之塔」です。慰霊祭では比嘉恵一南燈同窓会長(元本校校長)、渡具知佑麻生徒会長からも先輩方の死を悼む思いと、恒久平和への強い決意が語られました。今年の慰霊祭も、事前の会場設営から当日の運営、片付けに至るまで多くの名護高生が協力してくれました。吹奏楽部が演奏してくれた三中、三高女、名護高の校歌にはジーンとこみ上げてくるものがありました。三中三高女の先輩、遺族、同窓会の皆さんも後輩の協力にたいへん感謝していました。



在校生による献花と祈り

慰霊の日「特設LHR」～沖縄戦を学ぶ～



本校では、毎年「慰霊の日」の前に、沖縄戦の実態を知り、同じ過ちを繰り返さない決意し、命の尊さを考えるとともに、歴史の流れから沖縄の現状を理解し、未来を考える機会とするために平和学習に関するLHRを実施しています。今年は6/19(月)に名護市教育委員会の川満彰氏を招き、ヤンバルの少年兵「護郷隊」の真実について講演して頂きました。沖縄戦の中で、護郷隊への入隊を余儀なくされた多くの少年達が悲惨な死を遂げました。また重い過去(痛み)を背負って後の人生を歩むことになりました。なぜ、私たちは過去を学ぶのか？かつて西ドイツ(1990年に東西ドイツが統合)のヴァイツゼッカー大統領は、1985年の演説の中で第二次大戦の反省をふまえて「過去に目を閉ざす者は、現在に対しても盲目になる」と訴えました。過去の真実に目を背ける人は、今の時代を見ることもできません。ましてや未来を築くことなどできないのです。私たちは平和な未来を築くために、過去に起こったこと(真実)をしっかり学ぶ必要があります。生徒の皆さん、沖縄戦、沖縄のことをしっかり学び、未来へつなげましょう。

「平和メッセージ展」渡具知和奏さん 優秀賞！

沖縄県平和祈念資料館主催第28回「児童・生徒の平和メッセージ展」で、渡具知和奏さん(2年)が「作文部門」で最優秀(1人)に次ぐ優秀賞(2人)を受賞しました。



生徒総会開催、兄弟学級プロジェクト決定！

6/29(金)、生徒総会において各委員会の目標・方針、生徒会決算・予算案審議、各学年・部活動からの要望と関係部署による回答、執行部からの提案など、暑い中でしっかりとした総会が開かれました。その中で生徒会長の渡具知佑麻君(3年)から、1年を通して様々な分野で兄弟学級ごとに競い、絆を強めるプロジェクトが提案されて承認されました。最後に、玉城諒哉(3年)君が「生徒総会は自分達の生活をより良くするもの。これまででも要望を出して実現してきた(修学旅行等)。要望することは大事、しかしより大事なことは自分達が持っている課題に一人一人がしっかり取り組むこと、みんなで取り組むことだ。」と締めくくってくれました。